

「_____」は、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編及び
中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳編より引用

良心は、どのようなはたらきをするのでしょうか。

例えば、電車で座っていると、高齢者の方が乗ってこられたのが見えました。すると、良心は、「おーい」と「私」に声をかけます。その声を聞いて、「私」は、ハッとして、高齢者の方に目を向けます（ア）。そして、良心は、「高齢者に親切にせよ」と「命じ」ます（イ）。「私」は、その声を聞いて、サッと席を立ち、高齢者の方に声をかけて席を譲る場合（ウ）もありますが、「今日は疲れていて、今、やっと座れたところなのに」ともたもたしていると、良心は、「そのぐらいの疲れで何だ。あの人の方がもっとたいへんだろう」と「私」を責めます（エ）。「確かに、あの人は元気がなさそうだ。座りたいだろうな」と思ったり（オ）、「高齢になると足腰がどうしても弱くなり、電車の揺れで倒れたらたいへんだ」と考えたり（カ）します。その結果、「私」は席を譲ります。吊革をもち、流れていく街の灯りを見ながら、「私」は、ホッとした気持ちになります（キ）。

（ア）良心は、道徳的判断や道徳的行為が必要な場（価値の場）になったとき、「おーい」などと言って、「私」に呼びかけるはたらきがあります。良心は、どうして、「私」が価値の場に入ったことを察知することができるのでしょうか。価値の場は、演劇の舞台セットのようなイメージで、車内に座っている人や立っている人、携帯を触っている人などもあります。それらの人たちには、「一人一人が尊重される存在」という「価値の灯り」が灯っていて、良心は、その価値の灯りを見つけると、「私」に「おーい」と声をかけ、道徳的判断や道徳的行為が必要になることを知らせるのです。そこに、高齢者の方が乗ってこられると、舞台セット（価値の場）が変わり、良心は、高齢者の価値の灯りを見つけて、「おーい」などと声をかけるのです。この意味で、良心には、様々な価値の灯りから、その価値の場に相応しいと思えるもの、最善と考えられるものを選択するはたらきがあると言えます。良心が、このように、価値の場に変化がみられたことを敏感に捉えることができるのは、これまでの経験や学習によって高められてきたからだといえます。この呼びかけに対して、それまで何気なく車内を見ていた「私」がハッとして、高齢者の方に意識を向けることを「道徳的志向性」と呼んでいます。乗ってこられた人が、幼子を抱え、大きな荷物を持っていた人でも、松葉杖をついた人でも、同様に価値の灯りを見つけて、意識を向けることができるのは、経験や学習によって、道徳的志向性が高められてきたと言えるのです。

（イ）良心は、「私」によいことをするように義務を課すはたらきがあります。良心が、この舞台セットと価値の灯りを総合的に判断して、人々が乗っている車内では「人に迷惑をかけるべからず」という義務を「命じ」るのです。ここでは、良心は、具体的な行動までは言わず、「高齢者に親切にすべし」や「悪いことはすべからず」などと言うだけです。どのような行動を選択し実行するのかは、行為の主体である「私」であるからです。でも、「私」が行動を起こす前なのに、どうして、良心は、先に言うのでしょうか。それは、自分の弱さや醜さを知っているからです。これまで、「私」に義務を課しても、それにきちんと応えたときとそうでないときがあったことが分かっているからです。良心は、それを見越して先手を打つのです。

（ウ）良心からの声を聞き取ると、「私」は、自らの道徳性を立ち上げて、席を譲る判断をし、「どういう言い方がよいか」「どのように行動すればよいか」を瞬時に考えて行動します。このように、良心からの声に従って、瞬時に判断し、行動することを「直観的なはたらき」と呼んでいます。私たちは、多くの場合、この直観的なはたらきによって道徳的行為を行っているといえます。

（エ）良心は、「私」が義務を果たさないとみると、「私」を責め続けるはたらきがあります。「親切にす

るべきだろう。なぜ、しないのだ」と責め続け、「私」を苛みます（良心の呵責）。このとき、「私」は、行すべきよいことを認識しているにもかかわらず、自分の都合などを盾にして、それを拒んでいます。このように、なすべきことが分かっているのに、それができない状態ことを「葛藤」といい、自分がなすべきだと思っていたことを否定されたり、間違いだと分かたりして、なすべきことを新たに見いだせない状態のことを「迷い」、なすべきことが全く分からず途方に暮れている状態のことを「不安」といっています。また、なすべきことが複数あって、どれを選択するのがよいのかが分からない状態のことを「ジレンマ」としています。「葛藤」「迷い」「不安」「ジレンマ」と分けて教材分析をすると、授業展開や発問を考える参考になると思われます。

（オ）自分の疲れているからという気持ちと、座りたいだろうなという気持ちで判断するようなことを「感情的なはたらき」と呼んでいます。自分の気持ちを見つめ、相手の立場に立って相手の気持ちを想像し、どのような判断が、自分や相手にとってよい気持ちになるのかを考え、喜ばしい気持ちや好ましい気持ち、心地よい気持ちになるものは善であり、嫌悪感や怒り、不快を感じるものは悪となります。同じ車内でも、大声で話をしたり、ふざけまわっていたりすると、周りの人たちが迷惑に思ったり、不快な思いをしていたりすることになり、それは悪い行為となります。

（カ）「感情的なはたらき」とは異なり、高齢者の体力や車内の危険度などに基づいて判断することを「理性的なはたらき」と呼んでいます。一般的に言われていることやデータ、経験値など、根拠に基づいて判断することになります。

（キ）良心からの声に従って義務を果たすことができたと思った後には、ホッとしたような気持ちになり、見るものや聞こえるもの、感じられるものが、いつものものとは違ったものになり、清々しい気持ちにさえなります。これは、良心のはたらきではないかもしれませんが、まるで、良心が「よくやった」と褒めてくれているように思えますし、そう思いたいと思うところもあります。

一方、良心からの声に逆らって、義務を果たすことができなかったら、良心は、それに対して責めます。「疲れているぐらいで、どうして、席を譲ることができなかったのか。恥ずかしくはないのか」という声となり、それを聞いて、「私」は、自分の行いを反省し、後悔の念に自分を苛むのです。この後悔の念は、この次に同じようなことがあれば、そのときは、よいことをしようという意欲にもつながります。

このように、良心のはたらきは、次の4点です。

- ・道徳判断が必要な場（価値の場）になったとき、「おーい」などと言って、「私」に呼びかけるはたらき
- ・良心は、「よいことをすべし」または「悪いことはすべからず」と言って、「私」に義務を課すはたらき
- ・「私」が義務を果たさないとみると、「私」を責め続けるはたらき（良心の呵責）
- ・義務を課すことができなかった場合、「私」を責めるはたらき

このような良心のはたらきに対応する「私」には、次のようなはたらきがあります。

道徳的志向性	価値の場に入ったことを察知して、価値判断の対象に意識を向ける
直観的なはたらき	道徳性を立ち上げて、即座に判断し、行動に移す
感情的なはたらき	快・不快などの感情を基に判断する
理性的なはたらき	自らの道徳性に照らして判断し、最善の行動を考える

道徳的志向性は、良心の呼びかけに応じて、周囲を観察し、価値の場に入ったことを察知して、道徳判断の対象となる人やモノ、コトに意識を向けるはたらきです。高齢者の方が、電車に乗ってこられた場合と公園にいる場合、気温の高い日に作業をしている場合では、志向性の程度が、それぞれ異なりま

す。高齢者の方が公園にいるという価値の場なら、さほど注意は向けませんが、気温の高い日に作業をしているような価値の場なら、「大丈夫かな」とかなりの高さで注意します。道徳的志向性は、良心の呼びかけと価値の場を的確に捉えて、対象に意識を向けるのです。

直観的なはたらきは、良心の呼びかけと価値の場を的確に捉えた後、すぐさま道徳性を立ち上げて、これまでの経験や学習から得たことを基に、素早く判断し、適切と思える行動を取ります。これらを瞬時に成すには、その人の道徳性や道徳的行為への身構え、心構え、実践への意欲が、十分に養われていなければなりません。その意味で、直観的なはたらきは、その人の道徳性の現れと言えるでしょう。一方で、観察、判断、行動までの時間が短いため、どうしても表面的な様子だけで判断してしまうので、対象が望んでいることとの齟齬が生じたり、勘違いやお節介になったりする場合があります。しかし、もしも、そういうことがあったとしても、それを反省的に捉えることにより、経験として蓄積され、次の価値の場での判断、行動に生かされることになるでしょう。

感情的なはたらきは、直観的な判断、行動を一時的に立ち止まり、対象の立場に立って、思いやりの気持ちをもって考えることです。「美しいな」「すごいな」「やさしいな」「がんばっているな」などと心地よさを感じられることは善であり、「いやだな」「イライラさせるな」「やめてほしいな」「ひどいな」などと不快と感じられることは悪となります。このはたらきは、直観的なはたらきが、目の前で起っていることに対して、過去や未来のことや遠い国のことにも想像力をはたらかせて、道徳的な判断や行動を考えることができます。一方、これらの感情は、人それぞれであり、大抵の人が同じ感情をもつとは限りません。また、「すごいな。自分もやりたいな」と思っても、「今は忙しいから無理だな」と、感情的な快に対して、感情的な判断がぶつかってしまうこともあり、そのときそのときの気持ちで判断が分かれてしまい、一貫した道徳判断ができないこともあります。

理性的なはたらきは、良心の呼びかけと価値の場、自らの道徳性、それに対する自分の感情、そして、在るべき在り方などを総合的に判断して、最善と思われる行動を選択します。特に、自らの道徳性や自分の感情を客観化し、価値の場に最も相応しい在るべき在り方を思い描き、それに向かって正しいと思うことを判断し、複数の行動を思い描き、その中の行動を評価し、最善と思われるものを選び出します。たいへん思考的なはたらきといえます。一方、これだけのことを考えるには時間を要します。考えているうちに、行動するチャンスを逃してしまうことも考えられます。

このように、直観的なはたらき、感情的なはたらき、理性的なはたらきには、一長一短があります。

	長所	短所
直観的なはたらき	道徳性の現れ・早い対応	思い込み
感情的なはたらき	様々な立場に立った共感的・想像的理解	揺れ動く
理性的なはたらき	最善の行為・道徳的価値の根拠	時間を要す

3つのはたらきは、どれも大切で必要なはたらきですが、価値の場に相応しい道徳的行為を取るには、それぞれがカバーし合うバランスが大事になります。道徳教育では、道徳的志向性や直観的なはたらきを実践的に育てることを中心に指導し、道徳科では、道徳的志向性や感情的なはたらき、理性的なはたらきを育てることが中心となると考えられます。

このように、それぞれの段階で、良心のはたらきがあつてこそ道徳的行為に及ぶことができるのですが、その良心も自らの道徳性であり、道徳性がより大きくなることで、良心もさらに高められていきます。このように考えると、道徳教育や道徳科が、「道徳性を養う」とする意義の重要性を改めて認識することができます。